

平成30年度 第3回 知事広聴「平太さんと語ろう」 記録

【日時】平成30年8月7日（火）

午後1時30分～3時30分

【会場】生きいきプラザ 伊豆市民文化ホール

1 出席者

- ・ 発言者 伊豆市及び伊豆の国市において様々な分野で活躍中の方
6名（男性3名、女性3名）
- ・ 傍聴者 140人

2 発言意見

番号	分野・所属	項目	頁
発言者1	地域振興	伊豆修善寺のデザイン振興	3
2	農業	イチゴ農家としての取組	6
3	福祉	小学校跡地に開設した複合福祉施設の運営	11
4	教育	地域の子どもへの環境教育、被災地支援	14
5	観光 防災	伊豆市土肥地区の観光と防災を両立したまちづくり	20
6	地域活動	建設会社による地域貢献	23

【川勝知事】 皆様、こんにちは。お暑い中お集まりいただきまして、誠に恐縮でございます。この広聴会は58回を数えることになったんですけれども、これは広聴、広く聴くというふうになっております。広報と一対のもので、県の宣伝に来たものではありません、伊豆の国市、並びに伊豆市の代表の方々の意見を広くお聴きいたしまして、もし御要望があれば、それをできる限り実行するというので、いわゆる聞きっ放しのものではございません。今日はここに静岡県意思決定者が同席しております、そして仮に御要望が出て、すぐこの場で答えられなかった場合でも、必ずそのことにつきましては後日お返事差し上げて、聞きっ放しにしておかないということは申し添えておきたいというふう存じます。

それから、実は私昨日から伊豆半島に入っております、熱海の被災地を見るということだけでなく、今回は清水から船で参りました。1時間5分ぐらいのフェリーですけれども、お乗りになったことありますか。なかなかいいものです。

今回は操舵室、舵を切るところですね、そこに親子の方たちを招き入れて、船長さんがいろいろ説明するなど、イルカが遊んでいるなど、すばらしいもので、伊豆半島は実は清水からさらに日本平とか、そういうところにも遊びに行ける場所ですよということで、その逆も真なりでございますけれども、そういう一環としてそれに乗ってまいりました。

そして、またこちらでさまざまな地域のリーダーとお目にかかりまして、これを副知事と連携をとりながら県政に生かしていきたいと。特に今、伊豆の国市長さんが前にいらっしゃいますけれども、願成就院が国宝になりましたね。彼女がそれに尽力されました。あるいは韮山が世界文化遺産になりました。その尽力もなさいました。また、韮山の反射炉は江川太郎左右衛門さんと切っても切れない関係ですけれども、江川家の文書を文化庁にしっかりと認めさせるということもなさいましたし、また伊豆市の方は、今ペロドロームで高校総体が行われていまして、今日は閉会式ということで、伊豆市長はそちらに行かれていますけれども、ともかくオリパラがここで行われるということになって、世界の自転車のサイクリストの目がこちらに向いているということについても、伊豆市の皆様方のバックアップがあってこそだというふうに思っております。

それからまたわさび田が世界農業遺産になりまして、本当におめでとうございました。これも伊豆市中心に分布しております、田方は田方ですばらしい農業高校がありまして、農産物が農業芸術品だということが、つまり静岡県の農産物は単なる農産物ではないと。もう本当に人々の手がかかって、品質も形も味も、しかも安全性も高くて、そうしたもの

として農業芸術品というべきものだということで、農芸品とっておりますが、こうしたことも田方農高とか、こうしたことの積み重ねが裾野を広くして、多くのいい作物を育ておって、その代表がお茶であったり、わさびであったりするというふうに思っているところでございますが、伊豆市、伊豆の国市ともすばらしいところでありまして、世界の伊豆半島、まさにジオパークになったということでございます。

こうしたときに、こういう方たちのお話を聞けるというのを大変楽しみにしてまいりました。皆様方も参考にして共有していただいて、また我々ができることがありましたならば、御遠慮なく申しつけていただきまして、お役に立ちたいと思っておりますので、2時間ばかりでございますけれども、何とぞよろしくお願ひ申し上げます。以上でございます。

【発言者1】 よろしくお願ひします。御紹介にあずかりました燕舎の発言者1です。

私は伊豆修善寺で生まれ育ち、現在はデザインの力で地域を元気にしようと活動しています。川勝知事も学長を務められた静岡文化芸術大学でデザインを専攻し、在学中から「恋の橋めぐり」という若年層向けのPR事業を始め、温泉場の観光事業に携わってきました。

昨年、大学4年次には、温泉場の日枝神社のすぐ横に物販店舗をオープンし、今年の8月で無事1周年を迎えます。燕舎として、お土産物のリニューアルや商品企画、観光事業の企画からデザイン、そして店舗を使った販売まで、一貫体制で行っております。事業の詳しい説明はお手元の資料裏面に書いてありますので、後ほど御覧ください。

デザイナーという立場ですと、よく絵が上手にかけるのだらうと思われる方も多いのですが、実際それは決してイコールではなくて、アートとデザインには明確な違いがあります。アートは、概念や感情の表現、あくなき探求であるのに対し、デザインは前提として市場、マーケットがあり、ゴールもあります。

人によってデザインの定義に差異はありますが、私にとってのデザインとは、問題解決のための手段、そして価値創造のためのツールです。人々や社会、会社、地域の抱える不満・不足・願望を整理し、それに対するアプローチを多角的な視点から考える。そして目に見える形に落とし込んでいく、それがデザインだと考えています。

その手法は、時に建築物のデザインであったり、商品やパッケージ、ポスターのデザイン、案内サインを含むグラフィックであったり、ホームページなどのウェブデザインなど、多岐にわたります。

今回、特に私が取り組んでいるような事業は、一般的には地域デザインというくくりの分野に含まれています。地域の課題を整理して、どう解決していくのか、マネジメントを行う。地域の特色や魅力を整理して、活用方法を考える。そしてそれを地域の外へと発信していく、このような点が主な柱となっております。

近場で言うと、熱海のここ5年の再興ぶりは皆さんも耳にし、目にしているかと思うのですが、それもすべて地域デザインの取組の成果だと言えらると思います。修善寺も熱海と同じく、県内有数の温泉地と知られていて、「伊豆修善寺の出身です。」と言うと、「いいところですね。」というふうに言ってくれる人は多いんですね。

私の世代でも、まだ何となくいいところだなというイメージは頭に残っているようで、でも実際ここに来てみると、イメージだけが先行していて、十分な満足感を得られない。自分が実際ここに観光客として訪れたとしても、「リピーターになりますか」と言われると、確かにいいところはいっぱいあるけど、リピーターにはちょっとならないかなというふうに思うところが正直なところなんです。

今後ますます、少子高齢化によって、地域内の労働人口はもちろんですが、国内の観光客数というのは減少していくんですね。観光が産業の中心であるこの伊豆半島で、この減少は特に致命的で、今ここで、まだ何とか保っている、いいイメージがあるうちに行動を起こすことが求められていると感じています。

しかし、現状、地域内では、どうしていいのかわからない。確かに観光客は増やしたいし、商品のリニューアルも考えなきゃいけない。外国人観光客にもアピールしていかなくちゃいけないと思うものの、何していいかわからないんだよねという人も多かったり、高齢化が主な原因ですが、新しいことに手が伸びないというような人が多いのが現状です。

また、例えば行政主体であったり、観光課だったりとか、いざデザインというと、デザインを判断する目がなくて、すぐ都内の会社へと外注する。その結果、補助金や助成金は海外に輸出され、外のデザイナーさんが、地域のこともよくわからず、とりあえずお金をもらえるからいいかなという適当な仕事が残って、手元に残るのが宙ぶらりんの制作物という例が、伊豆がというわけではないですけども、全国的に見て、少なからずそういう例はあるんですね。

このような観光客としての不満、不足、地域の住民としての不満、不足、願望、このようなものを肌身に感じ、自分の学んだデザインこそ、今この地域に必要なだと考えました。

また、企業の替えのきく一社員としての仕事をするよりも、自分が生まれ育ったこの土地で、知人知り合いも多く、自分の力で仕事を切り開いていきたいと思って、都内で決まっていた内定を辞退して、こちらで活動することを決めて、今取り組んでいます。

今後は、お土産物の開発、リニューアルのほか、先日伊豆市長に提案させていただいたんですが、街中の案内サインを含む景観の整備、また情報発信として、新規ウェブメディアの設立などに取り組んでいこうと考えています。

ここからは、少し自分一人の力では賄いきれないので、行政だったりとかの力も必要になるんですが、空き家をサテライトオフィスとして活用していく試みを計画しています。昔から夏目漱石であったり、太宰治であったり、名だたる文豪が修善寺で執筆活動を行ってきたんですね。今で言うサテライトオフィス、本部から離れた位置に設置されたオフィスのように修善寺温泉街が使われてきました。

先ほども述べたように、日本の国内の観光客数が減少するのは、もう目に見えていることであり、今現在、主に力を入れているのが、今後外国人観光客を獲得してお金を落としてもらう、そのようなルートがよく見られますが、私個人としては、観光客や移住、そういうフェーズではない人々を増やしていく必要があると考えています。

働く環境として、この伊豆周辺を考えると、伊豆の踊り子号があって、伊豆縦貫道も開通した、都内からのアクセスはとても良好です。仕事に疲れたら温泉もあるし、人々は穏やかで、温泉街はとても小さなまちなので、ちょっと集中力欠けたな、集中したいなと思うと、近くに日枝神社があって、修禅寺さんがある。寺社仏閣というのは、集中力を高めるとてもいい場所とされて、今現在、都内を中心にオフィスの設計として活用されているんですね。このあたり、伊豆半島ですと、インターネット回線を整備する必要は、確かにあるんですけども、働く環境としては、なかなかいいと思っています。

このような空き家の活用であったりとか、ネット環境の整備、企業誘致等々、私個人の力では賄い切れないことも多いのが現状です。そこで行政と手を組み、地域企業さんや団体、地域の人々を巻き込みながら、楽しい、そして未来ある展開をしていければと、いろいろ策略中ですので、ぜひとも協力していただけたら幸いです。

会場の奥の方に、これまで手がけた商品であったり、具体的なデザインのプロセス、まとめたものがありますので、ぜひ皆さん、お目を通していただけたらと思います。

以上です。御清聴ありがとうございました。

【発言者2】 御紹介にあずかりました伊豆ホーリーズ株式会社の発言者2と申します。

旧葦山町で農業、イチゴを栽培しております。伊豆ホーリーズ株式会社代表取締役と紹介していただいたんですが、実際単純な百姓でございまして、イチゴ農家とってお考えください。よろしくお願いいたします。

まず、今日私が最近一番、何と申しますか、思い立っているといひますか、農業って何なんだというところから、後継者不足みたいところを私なりに少し考えた思いをお話したいなと思って、今日は参りました。

会場の入り口、あちらの方に弊社の加工品がございまして。それからあとは資料の中にパンフレット、小さいやつなんですけれども、ありまして、イチゴと加工品が載っていますので、またちょっと御覧いただきたいのですが、祖父がイチゴを始めまして、父親がそのイチゴの事業を継ぎまして、そのまま次の私が二十歳でイチゴの事業を継いだという形の3代目ということになってはいますが、父親と技術合戦をしまして、3年、私は父親の右隣か左隣かわかりませんが、歯を食いしばり、自分の意思を抑えながら、必死に勉強するつもりで3年、父親に何とかついていきました。

その間、私なりの考え方が、どんどん、どんどん出てくるのを感じまして、3年経った後に、よそで少し間借りをさせていただきまして。イチゴって人間的な、作業したり、切り受けしたり、そういったところの1人の労働力としての栽培の限界が1,000平米と言われている中で、およそ1,000平米強ぐらいの間借りさせていただきまして、そこで自分の畑を持ったということですね。

まず一番最初の年に、僕だったらこうするという父親にたんかを切って始めたことなんですけれども、僕だったらこうするを、そのままそうしてみましたところ、父親と栽培をしてみたときの半分の量のイチゴしか収穫できませんでした。大失敗をいたしました。1カ月全くイチゴがならず、ハウスにいてもやるものが何もない。大事な、例えば2月という1カ月をすべて失ってしまい、売り上げもなかったです。

そこを初年度で経験をしまして、私独身だったものですから、今しかないなと思ひまして、今だったらどんな失敗でもできるという覚悟で、自分の技術をどんどん確立しようと思ひまして、その失敗をバネに、またそれに肉付けをしたりして、いろいろ試行錯誤しまして、その次の年にたくさんイチゴが採れました。またその次の年も少し、今度は品質が良くなって、たくさん採れました。また、その次の年も良くなりました。

どんどん欲が出てきてまして、次の挑戦をしてみようという中で、27歳のころに、2010

年だったんですけれども、農協の中央会さんというところの主催で、ヨーロッパでの10日間の研修に20名程度の団体で行かせていただきました。

そのとき行ったんですけれども、確かに日本と気候が違いますし、行って何がというわけではなかったんですが、帰ってきてみて、その国の、例えば日本で食料自給率が40%を切るとかという話の中で、当時、例えばドイツ、スイス、イタリアへ行ったんですけれども、どの国も200%とかという数字がございまして、何で200%なんだろうと思って、路地に植わっている、例えばレタスとかが植わっているんですけれども、すごく小さいですし、緯度が高いので害虫も少ないですとか、雑草もそんなに伸びてないんですね。雑草も生えない、病気も少ない、つくりやすい環境の中で大規模に事業をして、食料自給率200%というものを獲得していたと、そのときは思って帰ってきました。

その後で数字を見まして、根拠も薄いんですけれども、私が例えば文献でしっかり見たということではないのですが、そのときの感覚で出た数字が、例えば視察に行ったヨーロッパの農地が国土の60%という数字があるのに対して、日本の農業耕作地は国土の12.4%という数字がございまして、見たところ、国のおよそ5分の1の耕作地しかない中で、食料自給率40%というところですね。

例えばヨーロッパのような広いところで、大きい機械で生産性のいいところで仕事をしているんですが、日本の場合、耕作地が、私が先ほど申しました1,000平米が1区画ですとか、でっかい機械が入りません。人間の手でやるしかないというところで、その中で食料自給率40%というところを考えたところ、例えばヨーロッパと同じ国土の60%が耕作地、農地だったことを考えたときには、国民の人口もヨーロッパは少なく、例えば見に行った国それぞれ6,000万人ずつぐらいの人口でした。

というところを計算してみたら、私の独自の見解なんですけど、実際日本の食料自給率400%、その行った国の指標に直して計算しますと、400%という数字が出まして、なんということだと私はびっくりしました。

その400%にたどり着いたというところは、先代から、先々代というか、祖先の先祖のみたいなどころから、技術をやっぱり積み上げてきて、隣の畑も近いものですから、お隣さんと競い合いながら、技術合戦を繰り返してきた先輩たちの後ろ姿が霞んで見えて、そういったところをやっぱり私も追究をしていきたいという気持ちが、すごく格好いいなと思ったところが、何か私の欲望みたいなことになりまして、そこから、そのときに技術的にも、私の技術がある程度のところまで来ているなと思っていましたものから、

何か尻に火がついたような思いで、加工品というのに取り組んでみたいとか、いろんなことを考えました。その中で、父親がおりまして、すべて父親のものです。畑もそうです、すべて父親の名前で、そこには、例えば印鑑を押したりですとか、名前を書いたりですとか、登記があつたりですとか、そういったものがあり、自分の事業が行えないという中で、やっぱりそういう意味合いで自分の会社をつくったというのが、私の会社の成り立ちです。

そうしたところ、とにかく借金ができることになりましたということで、お金を借りてしまったので、もう本当に自分は後には戻れませんので、技術力はあるんですが、販売先もありませんという中で、必死になってやっていたわけなんですけど、そんなことをやっていたら、ある若者から「社長、1回飲みに行ってもらえませんか。」というお誘いがありまして、男性なんですけれども、当時25歳、私が32歳、飲みに行ってくれと言われてまして、何だ何だと言って、飲みに行つて楽しい話をしたんですが、私も仕事に対することももちろん話しましたし、少し女の子の話もしていましたけれども、「僕、社長のようになりたいです。」というその一言が、酔っ払っていましたが、出まして、そうかと思いました。

私が先代の先輩方の背中が霞んで見えたあのときの思いをまたそこで思い出しまして、もしかしたら農業の未来はそういうところにあるんじゃないかと、食料をつくる、食品をつくる、何と云つたらいいか、例えばその若者に言わせたら、「イケてる」と言うんですよ。

そういったところを継いでいくというのは、農業の例えば後継者不足、農地を維持するとか、国土の治水事業とか、いろいろ農業にはくっついていると思うんですけども、大事な産業だと思つているんですけど、やっぱりそういった背中をしっかりと先輩が見せて、しっかりとした体制で、若者に誇れるような、若者が惚れるような仕事をしていくということが、私が最近一番気になっていることでして、そういう農業を目指しながら、立地も気候もいい静岡県東部で、そういった形の事業を今後ともやっていきたいと思つております。ありがとうございました。

【川勝知事】 感心しました。今、発言者1さんと発言者2さん、それぞれ大学を出たばかりのヤングレディと、非常にたくましい発言者2の青年のお話を聞きまして、いいなと思つた次第でございます、まずは。

それから、何といても発言者1さんは静岡文化芸術大学というところを出られて、いい大学だなと改めて思った次第です。県外に出たわけではありませんけれども、親元を離れて、向こうで勉強して、デザインが何であるかを知ったということが、お話を通して、体の中にデザインが何であるか、わかったわけですね。アートとは違うと。マーケットが前提にされている。ですから人の心に訴え、かつ、それがマーケット、すなわち人の役に立つから、お金を払って買ってもらうという、そういうものでなければデザインとは言えないということで、アートとの違いを明確に踏まえた上で、デザインの道に生きようと。

最初「恋の橋めぐり」と言うから、少女少女しているなど、そういうお話かなと思ったんですけども、実際は、伊豆市長の卵みたいな、そういう印象さえ持ちましたね。

そして、この修善寺近辺を全体、いわゆる都市空間をデザインするという、そういう志をお持ちなんですね。ですから小さな録音機から、大きな生きいきプラザのようなもの、それからもっと大きい伊豆市、あるいは伊豆半島というのも、小さなものから大きなものまで動かす力をデザインは持っている。

ですから、今後に期待して、議長さんも聞いておられるので、こういう若い感性が非常に豊かで、そして思いが非常に深い、こういう人の力を生かしていただきたいというふうに思いますね。

大変誇りに思う卒業生のおひとり、しかも今年1周年とおっしゃいましたけれども、ということは大学のときにもう既に立ち上げたということですね。それがまたすごいですね。ちゃんと東京のデザイン事務所に決まっていたけれども、それを蹴ったというのがいいじゃないですか。こういう勇気あるすばらしい女性を生んだこの伊豆地域というのは、いいところなんですね。

ここの方がいいと、ここの方が場の力を持っている可能性があるというそういう確信のもとに、その彼女の持っている潜在力は静岡文化芸術大学で花開いたんですね。これからもどうぞよろしく願いいたします。今年20年を迎えました。まだ二十歳ちょっと出たばかりのお嬢さんですけども、立派なものだと思いました。

それから発言者2さんは、お父上がすばらしいんだなど、まずそれを思いましたですね。お父上を尊敬されて、石の上にも3年といいますけれども、とにかく父君の技術が確かであるということを息子は知っているわけですね。ですから、もう文句を言わないで、とにかく言われるとおりに、父の技術を盗むといいますか、習うというか、そして3年たって自立して失敗すると。これがまたいいですね。父に敵わないということがわかった。

何か宮本武蔵の話を聞いているみたいな感じで、沢庵和尚に痛めつけられて、武者修行に出たと。そしてヨーロッパに行って、この青年の偉いところは、ドイツ、食料自給率が200%だと、うちは40%だと、だけどうちの国土の12.5%に対して、ドイツは60%が農地だと、5倍あるじゃないかと。その200%を5で割れば40%になります。あまり変わらないじゃないかというふうにはっと悟って、捨てたものじゃないというふうにきちっと、これはもちろん数字上のことではありますけれども、そこでともかく死にものぐるいでやって、そして30代前半で、それを見ている周りの方が、「先輩、僕も先輩のようにになりたい」と言ったときに、しっかり自立していたんですね。感動的です。

私はこう思っているんですよ。恐らく15ぐらいのときに、お父さんすごいなと思ったに違いないですよ。そしていつかお父さんのようになってみたいということで、修行時代に入った。そして30で立ったんですね。30にして立つというじゃないですか。40 惑わずと。

ですから、こういう青年が伊豆の国市から出たというのは、これはやっぱりこれも伊豆の国市というのがいいなというその証左でもあるんじゃないかというふうに思います。源氏は3代で終わりましたが、これはもう徳川家ですな。家光です。家綱、綱吉、ずっとこれから続いていくようなすばらしい方であります。

ちなみに、一言だけしますと、食料自給率というのはカロリーベースなんですね。例えばわさびのカロリーはどうか。ゼロです。お茶のカロリーはどうか。ほとんどゼロです。しかしお茶なくして日本の食事は成り立ちませんし、わさびをなくして和食は成り立ちません。お寿司も刺身も成り立たないということですから、カロリーベースがいいかどうかということも、実は問われるべきなんです。

例えば東京のカロリーベースにおける自給率は何%でしょうか。1%です。あそこに1,200万人の人が住まわれている。その10倍の人口が1億2,000万、日本の人口です。食料はどこが担っているかという、北海道や東北なんか担っているわけですね。では、その食料自給率を4割から4割5分に、あるいは5割に上げようとしたら、どこをどうしたらいいんだと。そうすると北海道よ、東北よ、もっと頑張れと言うでしょう。違うと思いますよ。東京、農水省がもっと頑張れ頑張れと言っているなら、君たち自身が北海道や、あるいは伊豆半島に来て農業に従事しなさいと。99%他県に依存しながら、官公庁の偉い人が食料自給率を国として上げるなんて言うのはおかしい。

それから、そもそもわさびやお茶なんか、カロリーがゼロであるけれども必要だということであれば、カロリーベースで食料自給率をいうことが正しいかどうかということも

あります。そうしますと、仮に東京の人たち、一番何に関心があるかというところ、カロリー過多に関心があるわけですよ。カロリーを減らして、なるべくスマートな体つきになりたいとかということをやっているわけでしょう。何を言っているんだということ、カロリーベースの自給率なんかには惑わされることはないですよ。

静岡県は農作物だけで339品目あります。これは2番が158しかありません。2倍にしても316です。静岡県は339品目もあるんですよ。そして、例えばこの発言者2さんのように、自分の技術は確かだと、つまり品質が極めて高い、この技術は誰にも負けない。この品質と価格とどちらが大事かというところ、私は価格も品質も同じくらいに大事だ。安ければいいというものではありません。

日本のイチゴは、あるいは農作物は安全です。おいしい、形も味もいい、こういう完璧なもの、これは品質が高いから、これは幾らでも高くお金がついてもいい、芸術品みたいなものです。デザイン、すなわち美しく、かつ食として健康の役に立つ、見事なこれ、イチゴは農業芸術品ですよ。

そういうふうに私は思っております、そういう意味では農芸大国で、日本一なんです。しかも静岡県は食料自給率が幾らか御存じですか。カロリーベースでいったら17%です。日本の平均は40%弱です。だからとてもかなわないですよ。そこをベースにする必要はないと。健康を維持するには、いろいろなものをバランスよく食べた方がいいでしょう。いろいろなものをバランスよく食べられる地域というのは限られていますよ。

我々は静岡県の農作物を、私は農業芸術品、農芸品と言っておりますけれども、そういう観点から発言者2さんの仕事を見直すと、この人は芸術家ですね。同時に、人の役に立つデザイナーでもあると。同時に、3代目の農家でもある、農業芸術家だというふうに思った次第でございます。ありがとうございました。

【発言者3】 ただいま御紹介いただきました社会福祉法人春風会の発言者3と申します。本日はこのような席にお招きいただきまして、大変ありがとうございます。今回、私は福祉の関係者として呼ばれておりますので、私どもが運営を開始しました新しい形の複合施設について説明させていただきます。

最初に、私どもの法人の説明をさせていただきます。私ども社会福祉法人春風会は、昭和51年に沼津市で法人を設立し、沼津市を中心に伊豆市、伊豆の国市で、高齢者、障害者、児童などの福祉事業を行っており、40年の歴史があります。

伊豆市におきましては、平成6年に特別養護老人ホーム伊豆中央ケアセンターを開設し、現在修善寺、中伊豆、天城湯ヶ島地区に5つの事業所があります。その中の1つで、平成28年4月に開設しました複合施設ふらっと月ヶ瀬を紹介させていただきます。

皆さんのお手元のところに、小さいですけども、「複合施設ふらっと月ヶ瀬」という資料がございますので、御覧いただければと思います。それとちょうど会場の向こう側のところに障害者の施設でつくりました製品も展示してございます。

その製品の中には、伊豆市特産のわさびの葉や、土肥の白ビワの葉を利用して染めたシルクストールがあります。その作品は昨年度、ふじのくに新商品セレクションで金賞をいただきました。その表彰状と川勝知事とのツーショットの写真も飾ってありますので、ぜひお帰りのときには見ていただきたいと思います。

それでは、施設の紹介をさせていただきます。この複合施設は、天城湯ヶ島地区の小学校統合に伴い閉鎖されました旧月ヶ瀬小学校の跡地に建設しました。公立の2つの幼稚園と1つの保育園を併合して、新たに認定こども園として、その園庭を囲むような形で高齢者のデイサービスセンター、障害者の就労継続支援B型事業所、そして地域の方が利用できるカフェ併設の地域交流センターで構成されております。

ちょうどパンフレットを開けていただいたところに写真が見えると思うんですが、この写真を見ていただいたときに、赤い屋根がこども園になります。それから奥の緑のところが高齢者のデイサービスセンター、そして手前のところが障害者の就労継続支援B型事業所、一番手前の少し2階になっているところが、カフェ併設の地域交流センターになっております。

認定こども園は公立から民間へ移行し、また3つの園の併合、さらに複合施設ということで、当初は園児の父兄の方々にも大変戸惑いや不安もありましたが、現在では普通の園生活を行っております。

また当初、障害者の方の中には、子どもの声に反応して、落ち着きがなくなるかもしれないという方もいましたが、特に問題なく利用しております。日々、園庭で園児が遊んでいる姿を窓越しに見て、園児の笑い声を聞きながら、それぞれの事業所が運営されております。

都市部の複合施設では、1階にこども園、2階に高齢者施設といったような、別々のフロアーに施設がありますが、この施設は学校の跡地ですので、敷地が大変広く、基本的に平屋の施設になっております。その特徴は、同じ目線にそれぞれの事業所があり、自然に

視界に入ってきたり、ほかの事業所の声が自然に聞こえてきます。私どもがこの施設を設計したとき、垣根のない福祉がコンセプトにありました。

開設から今日に至るまで、行政を始めとする関係機関の皆様や地域の方々の御支援や御協力を得て、少しずつ複合施設の形がつくられてきました。各事業所の職員の努力もありまして、開設からちょうど2年が過ぎ、園児の父兄の中には、障害のあるお友達と自然な形で接することができましたという声や、認知症の方や障害者の方と接することで、偏見もなくなりましたとの声も聞かれました。

先日、夏祭りがこの施設で行われ、園児がデイサービスセンターで魚釣りゲームや輪投げを行い、障害者施設の利用者がアイスクリームのお店を出店したり、お互いの触れ合う姿が大変ほほえましく見えました。

また、もう1つの特徴は、複合施設の利用や使用方法です。こども園に自分のお子さんを預けて、デイサービスセンターで働いている職員も数名おります。朝こども園に子どもを預け、夕方仕事が終わった後、一緒に帰っていきます。とても安心して働くことができます。

また、障害者施設に自分の子どもを通わせ、その親がデイサービスセンターに通っている方もいます。さらに、地元の敬老会や地域の会合、サロン活動を地域交流センターのカフェで行ったり、昨年の衆議院議員の選挙からは、このカフェが投票所として使われました。この複合施設を中心にさまざまなことが少しずつできるようになってきました。

良いことばかり話をしてきましたが、問題のことも幾つかあります。人口減少に伴う働く職員の確保、少子化による園児の減少、障害者の保護者の高齢化、高齢の単身世帯や老人世帯の増加による介護力の低下により、今後の私どもの事業運営の推移も予測することはできません。

しかしながら、この2年の間に、この複合施設を訪れた視察者は、県内外や、先日は中国からも訪れ、2,000名を超えました。福祉施設のあり方や、地域づくりの何らかの参考になっていると思われます。興味のある方は2度、3度と違う団体で訪れます。これからの福祉は普通に生活する場所として、別々に福祉施設があるのではなく、1つの場所においてお互いが自然な形で触れ合うこのような複合施設が多くなっていくと思います。

この複合施設が地域の拠り所となり、地域独自の新たな利用方法や施設を中心に、人の輪が少しずつ広がっていくことを期待しております。今後は、この複合施設のすぐのところに伊豆縦貫道の月ヶ瀬インターが今年度中に開設されます。三島、沼津への通勤も1時

間以内となります。東名高速を使えば、東京へも2時間程度で行くことが可能になります。先日も東京の多摩市から視察に見えた団体は、八王子から圏央道を使って海老名ジャンクションを通って、私どもの施設まで来て、約3時間で来たと言っておりました。ますます近くなってきます。

このような立地条件を私どもも生かしながら、この地域の人口減少が止まるように、少しでも地域の活性化や、地域のお役に立てるように、この複合施設の運営をしていきたいと思えます。

会場で、ぜひとも、見たことがない方がおられましたら、いつでも私どもふらっと月ヶ瀬の方にお越しいただき、いろんな皆様のアイデア、それからそういうものを参考にしながら地域づくりをしていきたいと思えます。どうぞ今度ともよろしく願いいたします。御清聴ありがとうございました。

【発言者4】 初めまして。伊豆の国市在住でYAMANEKO楽舎というボランティア団体の代表をしております発言者4と申します。今日はこのような大役を仰せつかりまして、緊張して倒れそうなんですけれども、本当に私どものような小さな団体にスポットを当てていただきましたことに、心から感謝申し上げます。

「YAMANEKO楽舎って何？」ってよく聞かれますが、ヤマネコも一緒に遊びたくなるような楽しい学舎という意味です。5年前に既存のNPO法人グリーン田方の軒を借りる形で、正会員8名でスタートし、3年前からNPOを独立いたしまして、社会福祉協議会加盟のボランティア団体となりました。

自然の素材のクラフト製作を通じて、自然のすばらしさを体感しながら、自然環境の問題を考えるとというのが基本理念です。伊豆の国を中心に、遠くは富士山こどもの国などでワークショップや講座を開設しております。お配りのチラシの裏面に印刷していただきましたものが、昨年度の伊豆の国ふるさと博覧会の募集要項になります。楽しんで自然素材のクラフトをつくりながら、自然のすばらしさを子どもたちにわかってほしいなというふうに思っています。

突然ではありますが、これは何だかおわかりの方、すみません、遠目で。この木の棒のようなこれですけれども、ヒントは山の中に落ちております。御存じの方いらっしゃいますか。いかがですか。時間もないので答えを。ダイオウショウの松ぼっくりです。

このダイオウショウの松ぼっくりを森の中でリスが食べてしまって、これが残るんです。

つまりこれがたくさん落ちている森は、リスが元気な森なんです。そしてリスはこういう木の実をいっぱい集めて、自分のところに貯蔵して、そこからまた抜き出してきて食べるということをする習性があるようなのですが、全部食べ終わらずに忘れてしまったり、何かの事情で全部食べ終わらなかった場合には、そこからまた森ができるんです。リスさんの忘れ物でさえも森をつくる、自然の中には無駄なものは何1つないんだねって、子どもたちにそんな話をしています。

ここまで聞いて、あれっと思われている方がいらっしゃるのかもしれませんが、YAMANEKO楽舎というと、実はこれですね。起き上がりこぼしを売る人たちというふうに使われているようなんです。活動を立ち上げた2013年、放射能問題による風評被害が深刻化している福島の人々のために、同じ日本人として、同じ時代、同じ時を生きる者として、YAMANEKO楽舎が何かできないかと考え、福島の支援活動に取り組み始めました。

具体的には、この起き上がりこぼし等の福島県産品を協力店やイベント等で販売し、その収益全額を第一原発6基中4基もある福島県大熊町の子どもたちへ寄附し、交流活動、さらには福島の方々の現状を発信していくという内容の活動です。

立ち上げ当初は、ガソリン代も、福島までの交通費、宿泊費も自前。完全ボランティアのその方針は、「発言者4さん、無理だよ、続かないよ。」というふうな愛あるアドバイスをたくさんいただきました。活動について全く素人の私たちでも、もっともだなと思いつながら、今6年目に突入しております。

私たちの活動を支えてくれたのは、当初のNPO法人です。そして私たちの活動を支えてくれたのは、伊豆の国の方々だと思っています。観光協会、商工会、地域イベント主催者の方々、観光施設、さまざまな場所で次々と出店活動に御協力いただきました。うちには起き上がりこぼし10個あるよというような方も少なくありません。そして新聞社、地元メディアの後押し、協力店での販売、私たちと同じように被災された方々のためにできることで協力したいという方が次々と集まって、起き上がりこぼしの輪が、お陰をもちまして本当に伊豆の国、三島、伊東など、遠くは南伊豆までどんどん広がっております。

さらに、私たちの活動を支えてくれたのは、やはり福島の子どもたちの笑顔です。寄附や交流活動で福島に出向くたびに、私たちは福島の方々の目に見えない放射能への不安と、故郷を愛する気持ち、その中から生まれてくる葛藤、当初の混乱、そんな中からも希望をつかもうとする福島の方々のたくましさを目の当たりにして、支援なんていう言葉はおこがましいと思うほど、私たちが元気をもらって、励まされる思いで帰ってまいります。

ここ数年、大熊小の卒業式に出席しておりますが、式の中で、卒業生の将来の夢が語られます。2つほど読ませてください。「私は災害救助犬の訓練士になって、大好きな犬と一緒にたくさんの人を助けたいです。」「福島を盛り上げる役場の職員になります。」、このように子どもたちは一人一人が震災と前向きに向き合い、自分たちの未来を見つめています。いまだに避難生活を続けている大熊の子どもたちは、原発事故、震災により住む場所が変わり、友達とも離れ離れになり、寂しさをいっぱい抱えています。私たちは遠く静岡にも応援している人たちが大勢いることを胸を張って伝えてきております。

災害大国と言われる日本の中で、懸念される南海トラフ地震、浜岡原発を抱える私たちにとって、福島の問題は人ごとではないと切実に感じています。私たち一人一人が減災への努力をするとともに、大きな災害、事故が起こったとき、人間には大きな不安が生じて、心の問題が残るように思っています。うまく言えないのですが、人としての心の問題の部分まで酌み取る形の対策がとられることの必要性を感じています。

今まで2つの活動の内容を聞いていただきましたが、ここからは私の個人的なことをお話しさせていただきます。5年前に活動を始めたことにより、地域のイベントの会議に参加するようになり、私なりに地域おこし、地域のことを考えるという視点を勉強させていただいていると思っております。

多方面で頑張っている方々に出会い、その方々を通じて地域の歴史や自然を知り、私の中で伊豆の国市がとても魅力的なまちになりました。地域おこしというには、あまりにも小さな視点ですが、まず住んでいる私たちが元気で、ここが好きだと思えるようなまちにしたいな、そのためには、この地域を知ることから始めたらいいいのかなと、自分自身の経験を元にそういうふうを感じています。

これまでにたくさんお世話になってきた大好きな伊豆の国を、何か私なりに恩返しができるとしたら、クラフトを通じて伊豆の国、伊豆の自然を紹介していくことなのかなというふうに思っています。

例えば伊豆の国には備長炭になるウバメガシの木があります。海洋性植物のウバメガシが内陸の水晶山や、城山、葛城山などに自生しているのは、ジオ的にも大変意味があることです。ウバメガシの落とすかわいいドングリを使って、子どもたちとクラフトをつくりながら、そんな話も子どもたちにもっともっとしていきたいなと思っております。

今このステージの上からYAMANEKOの仲間の顔、それから応援に来てくださっている知人の顔、そしてお世話になってきた役場の皆さんの顔、本当にいろんな人の顔が見

えます。福島のこの郷土玩具起き上がりこぼしの七転び八起きは、病気のために大好きだった教職を26年間であきらめざるを得なかった私への応援のメッセージでもあります。

本当に小さな団体の小さな活動ですけれども、たくさんの人とつながりを持ちながら、今後も続けていきたいと思っております。川勝知事、県行政の方の話が何もできなくて申し訳ないと思っておりますが、本当に御清聴ありがとうございました。

【川勝知事】 発言者4さんは先生でしたね。お優しい方で、本当に素晴らしい活動をされていると、心から敬服をいたしました。

発言者3さんは、なるほど人口減少をし、園児も減少する、小学校に行く子どもも少なくなる。しかしその結果、月ヶ瀬小学校が空いたわけですね。そして月ヶ瀬小学校をどう活用するかということで、そこに発言者3さんというふうな優れた方がいらして、認定こども園をしようと。そこにデイサービスの老人福祉の施設もあわせて入れようと。あわせて障害者の施設も入れようというふうになされた。

小学校というのは、一番通いやすいところに立地しているので、したがってすべての人が、義務教育ですから小学校に行っていると。そういう思い出の場所に1つのコミュニティを、複合施設というふうに言われましたけれども、1つのコミュニティをつくることに成功なさったんじゃないかというふうに思いましたね。

施設というよりも、新しい、いわば我々が失いかけている地域の中における連帯感だとか、そして人が必ず高齢になりますと、お世話にならざるを得ない。少子化の中で、どうしても福祉施設というものに入らざるを得ない。そうした中で、高齢になりますと、子どもよりもさらに小さな孫の世代と相性がいいんですね。

どうして相性がいいのかなと思うんですけども、ちなみにこの地球上にはわかっているだけでも2、3百万種の生き物がいるわけです。わかっているものを入れると3,000万種類ぐらいと言われるわけですが、その中で哺乳類は、雌は子どもを産めなくなると死ぬんですよ。すべての哺乳類は死にます。

しかしながら、人類、ホモサピエンスに限って、いわゆる出産がもうできない年齢を超えても生きている唯一の動物です。ですから、これは通常おばあさん、グランドマザー仮説、グランドマザー・ハイポシスというのがあります。どうして人類にだけおばあさんがいるんだろうと。

これは恐らく若いお母さんの育児を助けることができ、結果的にホモサピエンスの人口増大に役立つからだというふうに言われておりますが、ともかくそういえば桃太郎の物語も、川を流れてきた桃を割ってみたら桃太郎がいたといいますけれども、あれは川縁に捨てられていた捨て子じゃないでしょうか。その子を拾ってきて大事に育てたら、立派な青年になっていったと。

あるいは、かぐや姫も、光る金の竹があったので、そこを割ってみると玉のようなかわいい女の子がいたと。その子を一生懸命育てたら、帝までが恋をするような美しい女性に育ったと。それは竹藪に捨てられていた女の子だったんじゃないでしょうか。それをつまり自分の血のつながらない小さな子をおじいさんとおばあさんが育てているわけですね。

そういうふうに見ますと、本来かわいがることだけをする、つまり子どもに対する野心とか、子どもに対する希望とか、そういうものがなく、ただただかわいがる。そして愛情豊かに育って行って、優しく、たくましくなっていくと、こういうことではないかと。

結果的に、この認定こども園と福祉施設、デイサービスですね、こうしたものが一体になり、そして障害者の方がおつくりになる食べ物を皆と一緒に楽しむというカフェまでつくられたということで、これから担い手が少なくなっていく云々のこともございましたが、しかしながら、何とこの2年間で、先ほど発言者3さんのお話によれば、2,000人もの見学者があつて、外国人も来ているというわけですね。

人類誰もがこういうふうな高齢になっていきます。中国も一人っ子政策をとりましたから、少子化は間もなく来ます。韓国も一緒です。似たような状態があつて、どうしていいか。日本には実は見学に来て定住する人が増えていまして、特に静岡は多いんですよ。総務省の人口動態は日本人しか見てないんですよ。

数年前、北海道に次いで人口流出が多かった。今はそれが7,000人ぐらいあつたのが5,000人ぐらいに減ったんですけれども、それでも半端な数じゃありませんが、一方、人口動態統計には出てきませんけれども、外国人の定住者が増えているんですね。毎年1,000人ぐらい増えています。5,000人以上いるんですよ。ですから純増になっているんです、静岡県は。

ですから、ここにベトナムの人がいたり、カンボジアの人がいたり、その方達と結婚した人がいたり、あるいは全く外国生まれだけでも、ラグビーのリーチ・マイケル、お父さんはニュージーランド人、お母さんはフィジー人、だけど日本が大好きになって、日本人としてワールドカップで日本代表として見事な活躍をされた。お相撲とか、陸上とか、

ケンブリッジ君だとか、サニブラウン君だとか、サッカーでも、そういう人たちが私は静岡県というのは住みやすいところですから、人が親切ですし、景色もいいし、ですからそういう差別のないところができている。

人口は75億います。そして12億が動き回っているんですよ。だから6人に1人ぐらいが地球上を動いている。日本は確実に増えているんですね。

そして圏央道を通して3時間で来られたという話もなさいました。ここは非常に首都圏からは近いところで、しかも豊かなライフスタイルが選べる場所だということで、捨てたものじゃないというふうに思いますね。

先ほど伊豆市長さんもお忙しい中、来てくださいました。ちょっと立ってくれますか。あれが高校総体に関わるユニフォームで、こういうふうに高校生がこちらでプレイしまして、その中の優勝者はひょっとしたら2020年に活躍するかもしれないというような形で、全国の北海道から沖縄までの青少年が来ているわけですね。だからそれで何か見ているわけですが、自分たちと違う地域のこの良さを。ですからほかの地域からとるという意味よりも、人口増大で困っているところも逆にあるわけですね。そうしたことも含めまして、あまり悲観的にならない。そして発言者3さんのような優しい気持ちを持たれている方がいるというのが、この伊豆市の誇りではないでしょうか。

そして発言者4さんは、さらに感動しましたね。本当にお子様がお好きというか、小学校の先生としてプレゼンというか、わかりやすいように子どもたちに話す力をお持ちなので、その彼女が風評被害、平成23年3月11日、これが結果的に福島第一原発の大事故になった。我々も風評で本当に苦しみました。そうした中で大熊町という本当に第一原発のすぐ近くのところ、これを助けてあげようということで、福島を励ますために起き上がりこぼしをこちらで販売して、100万円以上の寄附をなさったりしておられて、そして自然を失うことがどれほどひどいことになるか。逆に自然から学ぶことにどれほど意味があるかということで、リスが食べる、きちっと全部食べないで、残しておくためにこういうふうになっているよというふうなことを実際にそれを身近な子どもに教えれば、これほど体の中にしっかりと刻まれる生きた知識はないというふうに思います。

ですから、学校の教室で教えられているよりも、ひょっとするともっと大きな生きがいを、あるいは新しい生きがいを感じられているんじゃないかというふうに思いますが、そのきっかけが大熊町という全戸が住み慣れたふるさとを失わざるを得なかった、今、会津若松に住まわれているわけですが、そういう人たちのところに、人ごとではないと

ということで、その気持ちをこの伊豆のだ真ん中からお伝えになっている、立派であると本当に感心いたしました。ありがとうございました。

【発言者5】 発言者5と申します。よろしく願いいたします。土肥温泉旅館協同組合の副理事長で、ちょっと前まで土肥温泉旅館協同組合の理事長をしておりました。降格をしてしまいましたが、特に悪いことをして降格したわけではありませんので、御安心ください。

そのときに海とともに生きる観光防災まちづくり推進計画、これに携わっておりました。先般、県庁の知事室においても知事に報告したとおり、後ろにも横断幕とトロフィーとかいろいろ飾ってありますけれども、今年の3月に海とともに生きる観光防災まちづくりをみんなで考える会で、ジャパン・レジリエンス・アワード、舌をかみそうですけれども、強靱化大賞といいます。これのグランプリを頂戴いたしました。

ジャパン・レジリエンス・アワードというのは2014年に設立された協議会で、強靱な国づくりや地域づくり、人づくり、産業づくりに資する活動、技術開発、製品開発等に取り組んでいる企業・団体からエントリーを募って評価をするという制度だそうです。

海に面した地域の地震津波防災というと、防潮堤とか、そういうハードの面が重視されるのが、まだまだこの国の現状であると思います。その施策は観光推進とは、海辺の観光地だと特にそうなんですけれども、相反するものであると思います。

ですが、土肥地区の皆様の考えとしては、土肥地区の主幹産業である観光業にマッチをした防災の方法をこれから取り入れて考えていこうと、非常に難しい選択をこの度したわけです。

とりわけオレンジゾーン、津波災害特別警戒区域というこの制度の指定を受け入れるかどうかということで、紆余曲折をしまして、この制度自体は簡単に言うと、浸水想定内の住民が津波から逃げることができるように、避難体制を強化する区域であり、あとは子どもとか老人ホームに入園されている方が、病床とか、そういうところは津波の浸水深以上に設けるようにとか、そういう若干の規制はかかりますけれども、すごく制度自体はこれを継承して、子どもから、またその子どもに計画の意思を継いでもらうという意味では、すごくいい制度だと私たちも思ったんですけれども、この名前がすごくどぎつくて、これは本当にそのまま受け取ると、津波が来て、すごい危険な地域だと誤解されないか、そういうことでいろいろと議論したわけです。

結局、市長はじめ、いろいろ風評被害が怖いという話なので、マスコミの対策とか、一生懸命して下さっております、万が一風評被害が起きたときに、その対策をしっかりするというようなところまで行き着きましたので、受け入れて、このたび指定を受けたわけです。そういったことをはじめとして、この土肥地域の決意に対してグランプリを与えてくださったのだと思っております。そして、この土肥から起こった今回の決断というのは、我々観光事業者としても非常に大変うれしい選択であったと思っております。

この背景には、住民の高い防災意識もさることながら、土肥地区の急激な人口減少もあります。このままでは本当に近い将来、土肥地区が消滅してしまうという危機感からも来ていて、主幹産業である観光業界と、それにマッチした防災まちづくりを推進することで、経済的にも安定して、そして防災面からも安心、安全なまちをつくって、土肥地区外からの移住者が増えることはもちろん、土肥で育った子どもたちが1回都会に出て勉強したり就職したりしておりますけれども、それがまた土肥がいいということでUターンして戻ってきてくれる、そして人口減を食い止める、そういったことを住民皆さんの意識にしっかりと根付いたということが根底にあると思います。

また、このことは静岡県の新ビジョンの2018→2027の一番最初の課題でもあります人口減少、人口流出への対応とか、超高齢化社会に対応した仕組みづくりとか、そういったところにも合致してくるのかなと考えております。

いずれにせよ、そのグランプリの獲得とか、観光防災まちづくり推進計画の1つであるオレンジゾーン、後ろにありますように、我々オレンジゾーンと言ってなくて、この名前をそのままどぎつい名前でいくのが嫌なので、皆さんから募集をして、「海のまち安全創出エリア」というふうに呼んでおります。後ろにあるオレンジの幕がその名称です。皆さんにはこの警戒区域の正しい知識の普及をぜひよろしくお願いしたいと思っております。

それで、この指定に全国で一番最初に自ら手を挙げたことによって、行政レベルでも全国的に注目されるような地域になったと、おこがましいですけれども、そういうふうに思っております。ただ、これは本当に始まったばかりのことなので、現状、そんなに大して何も変わっていないということがありますけれども、この機運が絶えないうちに次に何をやるかというのが我々の課題であり、皆さんから問われていることだと思っております。

オレンジゾーンの指定から現状の取り組みを説明しますと、土肥にはビル型の旅館がすごくたくさんあります。そこはほぼ避難ビルとして指定されておりますので、現在その主

要な旅館数軒に伊豆市の方から防災無線を配備してもらって、有事の際には各旅館及び、伊豆市の土肥支所との連絡を取り合うことができるようになりました。

これは海とともに生きる観光防災まちづくり推進計画の制定と、ゾーン指定、及びグランプリ獲得を観光事業者側と伊豆市の行政と協議した内容が、すぐに反映された事例だと思います。今後、一時的な避難場所としての利用だけではなくて、大きな災害時には、旅館には、体育館とかそういうところとは違って、畳敷きの個室がすごくたくさんあって、そういう旅館の特性を生かして、長期避難場所としての活用も我々は視野に入れております。

あと避難後、救援が到着するまでの数日間分の食糧や水、その他災害用の備蓄品を各避難ビルに備えておきたいということではありますが、とにかく民間の企業では賄うことができない部分があるため、この部分をまず行政に助けていただきたいなというふうに考えています。

あと次に、来たる10月28日に土肥地区で、主に海岸で遊んでいる観光客の避難を想定した地震津波防災訓練を内閣府と県と伊豆市主催で行います。今回は地震発生後、近くの旅館に避難をして、避難場所、これは学校だと思えますけれども、そこに移動する。そして避難所の運営、自衛隊による炊き出し訓練、炊き出しの喫食、アンケートの回収という形で、まだ予定ですけれども、そういう形で行うと思います。ただ、すぐにはできないかもしれませんが、今後もう少しイベント性が高くて、楽しくみんなが参加できるように仕立てていきたいと考えています。

例えばさっき言いました非常食については、ある一定の期間が来たら期限が切れてしまいますので、それは定期的に入れ替えなければなりません。それを例えば防災訓練で利用するというアイデアがあって、ただ単に食べさせるだけではなくて、土肥地区には旅館の板前さんがたくさんいますので、その板前さんにおいしくアレンジしてもらったものを参加者に食べてもらったりとか、参加者の好奇心をそそるような形にしていったらおもしろいんじゃないかなと、これは個人的な意見ですけれども、思っております。

あと、問題があって、海岸部でも近くに避難ビルがなくて、逃げられない場所があります。そこで、それは土肥港から7、8百メートルぐらい離れたところにある松原公園というあたりなんですけれども、そこに今避難タワーをつくってほしいというような要望を出しております。

そのタワーも、ただ単に無機質なものではなくて、例えば1階から2階は道の駅、海の駅なり、そういったような売店の施設などが併設されて、一見避難タワーには見えないような、見えないと避難するときにわからないかもしれないですけども、わかるような、難しいですけども、そういったものをつくってあげれば、観光にある程度マッチしたものになるんじゃないかなと思います。

個人的には、せつかく県道223号線が土肥港まであるので、それを避難タワーまで引っ張って、その施設を終着駅みたいにしたらおもしろいんじゃないかなと思っております。

最後になりますけれども、土肥地区の防災は、本当に観光とのマッチングにより、防潮堤など、今は防ぐためのハード的な考えよりも、逃げるというソフトの部分、それを支援するハードも必要ですけども、それを重視するようなモデル地域として手を挙げたわけですけども、特に海岸部の一人暮らしのお年寄りとか要支援者の避難、あとは津波や地震で倒壊する恐れがある建物の問題など、非常にまだ課題は多いです。

これも個人的な考えになりますけれども、ゆくゆくは要支援者が津波浸水区域以外に容易に移住できるようなコミュニティを創出したり、観光区域と居住区域の分離、あとは要支援者の移住によってできた空き家を観光的な利用をする。例えば空き家を店舗に改装して、土肥地区への移住者で商売をしたい人が容易に開業できるような支援策をあわせて行って、新たに観光ストリートを創出するなど、利用価値はすごくたくさんあると思います。

今後実際に協議会の方でいろいろな事項が決まってくると思います。行政的に解決しなければならぬ問題がすごくでてくるとは思います。観光と防災のすみ分け、両立を意識したモデル地域として、まちづくりを今後も行っていきたいと思っておりますので、どうか、どうしたら実現できるのか、一緒に考えて実行していただければ、非常にありがたいと思います。

今後も土肥温泉旅館協同組合が推進する観光防災まちづくり計画を末永く全面的にバックアップしていただきたいと、知事にはよろしくお願い申し上げたいと思います。以上です。どうもありがとうございました。

【発言者6】 ありがとうございます。長い時間になってきたものですから、私はちょっと立ってお話をさせていただければと思います。皆さんもどうぞ一度立ち上がるなり、背伸びするなり、少しリラックスした状態でお話を聞いていただければ大変ありがたいなと思います。

発表者の最終を努めさせていただきます、土屋建設株式会社の発言者6と申します。まずこのような機会をいただきましたこと、関係者の皆さんに感謝申し上げます。ありがとうございます。

こんな立派な場面ですので、服装に悩みました。ですが、先ほど伊豆の国市長にもお褒めの言葉をいただきましたけれども、今日は失礼ながら自社の制服、作業着で参りました。見てのとおり、作業着ですので、建設会社の一職員でございますが、私普段、上着を着ることがほとんどないものですから、ここに今1時間半ぐらいいますけれども、暑くて暑くて顔が真っ赤になっているのを自分で自覚しておりますけれども、この作業着、毎日暑い中、現場に立って、作業員の安全とでき上がった構造物、道路や橋脚、護岸等々が地域の皆さんの安心を守るようにと、日々頑張っている監督たちと全く同じものです。

また、そんな建設業の人たちは災害の際には誰よりも早く、緊急車両の通る道を啓開し、瓦礫等をよけて、通れる道をつくります。万が一の恐れがあるときには、昼夜問わず、河川や道路のパトロールをする、地域の安全を守ることを使命とさえ言うてのける、創業88年の地場建設会社の社員であるという証、そんな私は現場に立つことはできませんが、それでもこの服は誇りだと思っています。

農業を営み、道路や水路の整備を通常時行いながら、万が一の災害救援に飛び出していき、そんな屯田兵の発想を1つの理由として始まった農業分野参入の中で、私は販売業務を兼務させていただいております。お手元の資料は一般向けに簡単に記載しておりますが、お時間があるときに御覧いただければと思います。

野菜という皆さんにとって身近なものを通じて、昔からの顔なじみの商業の方々から御協力をいただき、また福祉事業所である障害者就労支援施設の方々に販売を担当していただき、地区のボランティアの方々と共同で、これからますます深刻化するであろう買い物支援の策への挑戦もしております。地元でつくった総菜やパン、弁当、野菜が、買い物困難地域まで届いたならと、まだまだ挑戦が続きます。

ところで、突然ですが、皆さんにとって地元の建設屋さんて、どんなイメージでしょうか。幼いころから触れている私でさえ、ときどき、「いやあ恐いな。」というような強面の親父さんたちに会います。うちの社員も決して例外ではないと思っています。

でも、そんな親父さんたち、実はとっても繊細で、ロマンティストな方だと改めて感じておりますのが、市建設業協会が作り手を主だって引き受けさせていただいております「ベンチプロジェクト」です。このベンチは、閉じこもりがちな高齢者が、今日はあそこまで

行ってみよう、明日は誰かに会えるかもと地域に出てきてくれる小さなきっかけになっただけという思いからスタートしています。

ロマンティストの建設屋さん、自身の腕を振るって、照れ笑いしながら、思いやりのあるベンチをつくってくれます。置き手の店舗や個人宅の方々、今日座っていらっしゃる発言者4さんも、今回置き手としてベンチを置いていただいておりますが、そのベンチに集う小さなエピソードを温かく見守ってくださっています。

人の思いが通ったベンチ、お手元に事例集、添えさせていただきます。ある市の福祉事務所の職員の方が、私に何度も言います。小さなベンチが誰かの明日への生きがいや、地域で暮らす安心になる。ぜひ機会がありましたら、お気に入りのベンチを探しに、地域に繰り出していただけたらと思います。

地域の安全・安心ときました、次は元気事です。伊豆の国市ではふるさとの自慢を集めたふるさと博覧会を実施しています。先ほど発言者4さんにこれも言われてしまいましたけれども、私も実行委員として参加させていただいておりますが、今まで知らなかったことを知ってみよう、自分の頑張っていることを人に知ってもらおうと思うきっかけ、ふるさとで好きな人や事が増えたなら、一人一人が輝くセールスマンになれるかもしれないという思いで参画しております。

私の母も日本舞踊の師から地域の元気を願い、保存会や市内のダンススタジオの方々と協力して、伊豆の国音頭や、東京五輪2020など、地域にまつわる宝をもっと知ってもらう活動で、ふるさと博覧会に協力してくれています。私は母の子でありながら、全く踊ることができません。リズムがとれないんですね。

でも、これこそまさにいろいろな形や色、サイズのベクトルが同じ方向を向き、同じ目標、「ふるさとを元気に」に向かって一緒に走って、互いに逆方向へ引っ張り合うのではなく、相乗効果を生む何倍もの力になる、仲間が増える、そんな「おらがまち自慢」になっただけという思いで信じています。

最初の発言者の方は修善寺生まれの静岡県内の大学に進学されたというお話でしたけれども、私は関東へ進学したときに、ふるさとに救われたと思っております。1円玉ほどのサイズに見える富士山が、私にとっての勇気でした。富士山のふもとに住んでいるであろうみんなが私の記憶でした。生まれ故郷じゃなくても、今住んでなくても、頑張るときに力をくれる、楽しいときや嬉しいときに話をしたいと思う、苦しいときには振り返って待っていてくれる、そんな父や仲間たちのようなふるさとをこれからも大切に思ってい

たいと思っています。私はこのまちに関わるたくさんの人たちに生かされています。御清聴ありがとうございました。

【川勝知事】 発言者5さんと発言者6さんにお話しいただきまして、たくましいですね。挑戦する精神というか、それを感じました。

一番最初に発言者1さんと発言者2さん、若い力を感じまして、発言者3さんと発言者4さんには本当にお優しい心を感じたんですけれども、まず発言者5さんですね。これは伊豆市長ほか、とくに土肥の方たちが津波災害特別警戒区域、オレンジゾーンと言われて、これにどう対処するか。大変な課題だったと思いますけれども、勇気を持って、それをそのまま受け入れるといいますか、この努力に動かされて、海とともに生きるのが土肥だという、そういう共通認識を土肥の人たちが持ったのではないのでしょうか。

ですから、海と隔ててはいけないと、自分たちも祖先も海とともに生きてきた。しからば、ここが津波災害特別警戒区域といわれようと、海とともに生きるのだと、そういうふうお決めになって、それを堂々と声を出されたわけですね。

ただし、安全について考えないのではないのだと。ただ名前はやっぱり名は体を表すというところがありますから、この名前を「海のまち安全創出エリア」というふうに、新たに自分たちでつくった安全を創出しているエリアですよというふうにしたところに、勇気といいますか、たくましさというか、それがもう表れていると思いますね。そうしたならばジャパン・レジリエンス・アワードというのがグランプリとして飛び込んできたというわけで、これはもちろん伊豆市の誇りであると同時に、静岡県の誇りでもあります。

日本は基本的に7割近くが山国ですから、ほとんどの人たちが沿岸部に住んでいるわけですね。ですからここと同じような心配を持っている人たちがたくさんいて、臆病なところもあります。あるいは怖がって、そんなこと言ったら、かえって変な風評を生むよとかいういろいろな御心配、懸念もあるという中で、堂々と言ってのけたというのがいいですよ。

そして、じゃどうするか。訓練をする。実は伊豆半島全体を50くらいの地域に区切りまして、どうしますかと言ったわけですね。どうしますかと言ったら、15mないし10m以上のコンクリート壁をつくって、これで津波から守りますとっているところがあります。

一番最初から私どもは海岸が506 kmあります。そのうち21 ぐらいの市町が海と面しているんですね。そうした中で、それぞれどうしますかと。そうすると、こうしましょう、

ああしましょう、防潮堤をつくるとか、伊豆半島の方は海とともに生きるというのが大半ですよ。だからハードで海と遮断されるのは、海とともに生きられない。だからソフトパワー、これをむしろ重視すると。

ただし、先ほど発言者5さんがおっしゃったように、きちっと逃げる算段をしておかなくてはならぬということなんですね。御自身のお仕事は旅館ですから、旅館が災害のときに何ができるか。それは接客サービスですから、困っている人たちがそのときに避難ができる。それからまた非常食を訓練のときに板前さんがこれを料理して、非常食を新しいのに更新するのにこういう形でやったらおいしくいただけるんじゃないかとかおっしゃっている。

それから松原公園のところをどうするか。これは地域局で危機管理もやっていますから、道の駅、つまり平時には道の駅として楽しもうと。そして有事にはそこにちゃんと避難できるような、そういうものをつくる、こういうふうに発言者5さんおっしゃっていますので、非常にユニークです。たくましいです。ですからこういう発想がいいですね。

それから、逃げられない人のためにはどうするかということで、例えば高台に移住されると。そうするとそこを空き家にして、その空き家のところに店舗をつくれればいい。その発想が、海辺のところは仕事場で、住むところが上の方で、じゃ上の方に住むとといったときに、上の土地はどうするかといったときに、これまた土地を取得するためのお金がかかる。お金がかからない方法を考える。

つまり全体で皆共有して、どの土地も不動産に対する税金がかかりますから、それは地代として取って、その分だけで土地が活用できる。いわば定期借地のような形にして、不動産の取得があまりかからないような方法もあるんじゃないかと私は思っておりまして、沼津でもそれを提案したんですけども、なかなかうまくいかなくて、上に行かれたらどうですかと。上に行くには下を売らねばならない。売らなくていいと。全体が共有するどこかの組合をつくって、それを共有して、そしてそこを借りる。下は自分の家、あるいは仕事場としてやったらどうかと。

これはもうちゃんと歴史的に経験がありまして、世界で最初のガーデンシティというのはイギリスでできるんですけども、労働者の方たちが家を持ち、かつ仕事場が近いのにはどうしたらいいか。全体の地域をある公社が1つ持って、そこを住む人は借り続けられるんですよ。ですから、不動産にかかる購入はしなくて、借りるだけです。だけど安心して借りられるというふうなことがやっているところがあって、それを応用したらどうかと

いったことがあったんですが、いろんな手法が考えられると思いますが、土肥流ですね、これを発想していただきたい。だけど職住を分けるという考え方ですね。これは考えるに値するんじゃないかと。そういう独創的なものを生み出す力がこの地域にあるなということを感じましたね。

それから、発言者6さんはいいですね、たくましいですね。こういう方を育てられた日本舞踊をされている母上と、88年、ですから会社としては米寿ですね、誠におめでたい。そういう会社の伝統が、こういうたくましいお嬢さんをつくられたんじゃないかと思いますが、建設業、それから農業をやるというその図柄がこのパンフレットにありますけれども、本当にそうだと思いますよ。

土と木ですからね、土木というのは。それから何か一時期ゼネコンがいろんな賄賂を取ったり、いわゆる談合でお金が動くところだという悪評が立って、土木に対する、建設業に対する風評が出ました。

今はこれはやってはいけないことなわけですけども、それにもかかわらず全部入札にしたら、全部大手が取っちゃいますよ。そのときに彼女は問題提起したわけです。建設業者は災害のときにどうするんですかと。啓開というのは、瓦礫を全部取り除いて、いろんな救援の人たちが入れるようにするというそういう専門的な用語です。これ誰がやるんですか。こういう大きな大地に対して技術を持って、それを取り除く力を持っている人がいなければできないですね。

ですから、実は東日本大震災のときにも、東北自動車道が通った、まずそれを啓開して、東北自動車道が使えますと、そして三陸の方向にいろんな道ができています。三陸の方向に向かって啓開していくわけです。その啓開を誰に頼んだかということ、東北地方整備局に非常に優れた国の役人がいまして、これは全員その東北地方の人たちと前もって契約といますか、申し合わせをしておきまして、いざというときには啓開してくれということで、その人たちが一斉に動いたんですよ。そして三陸の方向に向かっていった。そしたらついに沿岸近くになると、御遺体があるわけです。そのころになって自衛隊が来て、自衛隊が今度は御遺体の御収容だとか、非常に困難な仕事に当たっていったということでございます。

ですから建設業者がいないと、いざというときに救援にすら来れないわけです。だからこれ地域にとって不可欠なんですよ。その人たちが平時にどうしているかといったときに、あんまり仕事がない場合に、遊休土地があるから、これを農業に使う。これを耕作放棄地

なんかについて、鍬でやっていたらとてもじゃないけど時間がかかります。そのときに彼らが一気にその土地を耕作できるような形にして、すばらしいと。

ですから、私はこういう建設業者は建設だけやっているとは違う。自分は現場に出ないけど、同じ精神でやっている。人々のインフラを、人々の一番の基礎を支えている、それに誇りを持っている。何か辛いことが東京に行かれたときにあったんですね。そのときに自分がずっと見てきたふるさとのシンボル、またふるさとと不可欠な富士山に励まされたというのはいいじゃないですか。だから帰ってきた。

いやあ、今日はこの6人の方のお話を聞きましたけれども、全部良かったですね。今日は然るべき行政と連携をしないとできないことがあるので、ここは一緒にやりましょうねという、そういう要請はございまして、それはいかにもすべてごもつともなごもつことばかりで、中には伊豆の国市、あるいは伊豆市と協働してできることもたくさんございます。

県も、今日は松原公園の件が出ましたので、これは必ず、よろしくお願いします。発言者6さん、ありがとうございました。